

在 清 見 聞 録

中 村 彰 夫

- I 支那現時の狀態
- II 支那商業地理の概要及び運輸上の一般
- III 支那貿易の要点
- IV 支那の物産
- V 支那の製造業
- VI 支那内地商業の運轉

本稿は、經濟地理学研究の一助 にすることを 目的として、高橋正二氏 手記『在清見聞録』より拔萃してここに紹介するものである。

高橋正二氏は、明治 3 年久留米市に生まれ、同19年県立久留米中学校を卒業の後上京して東京英学校に学び、さらに同23年からは荒尾精の首唱によって開校された上海の日清貿易研究所に勉強、明治27年日清戦争勃発するや第二軍通訳官として従軍しているが、この間、三井物産合名会社へ入社香港支店に勤務し、同35年から上海の東亜同文書院の教授となった。帰国後の同42年から昭和 9 年までは郷里の久留米商業学校で中国語と習字を教え、同 9 年からは九州帝国大学で中国語を、さらに九州医学専門学校では語学と書道の講師を勤められたが、同11年に逝去されている。

『在清見聞録』は氏が日清貿易研究所在学中の手記で、明治23年 9 月にはじまり同26年 3 月に終わっているが、全文 5 巻毛筆を以て書かれ、漢字カタカナを使用し濁点・句読点は付されていない。

本稿を掲載するにあたっては便宜上、目次は全巻の中から抽出構成し、頭初に「支那現時の狀態」を取りあげ、明治中期とりわけ日清戦争前における中国（当時は支那清国の時代）の商業貿易並びに運輸についての一般的理解を容易ならしめることにした。

また、読解の便をはかってカタカナ書きをひらかな書きに改め、あらたに濁点・句読点を追加し、適宜注釈を加えたが、漢字やかな使い送りかなについては、原文に忠実をきして現代国語の表記と相異なるが、原文のままにとどめることとした。

I 支那現時の状態

我日本人并に外国人が久しく見て以て腐敗せり、臭氣を以て天下を覆へりとなす所の清国¹⁾は、今日に至り大に其面目を改め外侮を防ぐに足るの兵備をなし兵器軍艦等を整へ、十分外に向け爲す所あらんとするの勢をなせり。故に現今支那政府の外国に対して爲す所の政略、往々人をして其意外に驚き其勢力あるを想像せしむることあり。然るに余、数年来此国に在りて能く内状を察するに、実に腐敗の極点に達せることを知るに足れり。

清国は祖先以来相傳へて来れる諸制法も大に乱れ、朝紀振はず其危きこと恰も累卵の如し。而して其外面に顯るる所のものに此の如き人を驚かすの政略をなし得るかと云うに、彼の有名なる有力家たりし曾國藩（曾紀澤）²⁾が將に死せんとするに當りて、天子特に勅使を發して当今の国是を問ふ。曾國藩即ち「清国は長髮賊の乱³⁾を被り其他各処の乱民を征討する等の事により、國家の財政非常に困難を來せり。此二十余年間の餘弊を救はんと欲する、実に容易の業にあらざるなり。今や内には斯の如き憂ありて外には各国の我れの間を窺ふあり、内憂外患並び至りて実に國家危急存亡の秋なり。此時に當り宜しく布政使⁴⁾を信任して内に力を致さしめ、全國の力を擧げて外國の侮を防がざるべからず。外國の侮を防がんと欲せば軍備を治めざるべからず。」と。現政府は此遺言を信任して外國に対する政略をなせり。故に外國に向を取る所の方策は凡て支那國の全力を以てなせる所にして、外に向て活潑に見事なる所以なり。而して其腐敗せる実況を擧ぐれば一にして足らざるなり。

今其腐敗の度を知らんと欲せば、政府機關の腐敗を見るより明なるはなし。凡そ天下を統一するには必ず一の政略なかるべからず。其政略は治乱存亡の由

を来る本源なり。而して公義多く私利少なきを以て良政策となす。秦⁵⁾ 漢⁶⁾ 以降の政略は概ね霸道⁷⁾ の姿にして私を謀る事多く、国家の公義を愛するものは殆んど稀なり。清国の政略如何を觀察するに、今の愛親覺羅氏は北方満州より起りて支那全国を併吞せり。支那人より見るときは満州は外国なり。外国人支那全国を統一す。其支那人をして永く其統御下に置かんとするには、必ず之れを厭する一の勢力なかるべからず。猶英国の印度に於けるが如し。此故に清朝が唯一の重きを置く処の政略は、萬事満を以て漢を制し人民を愚にして之を籠絡する是れなり。今之れを清政府の組織法に依りて徴するに、其初め明の制度によりて官制を定めしも、其実施するに至りては満漢併用して其権衡を失せざるのみならず、枢要の地位には処として満人を用ひざる所なし。即ち中央政府に重複の位官者を置くのみならず、地方の政治には各主管する所を異にして其権衡を保てり。即ち総督⁸⁾ は兵権を握れども財政の権なく、巡撫⁹⁾ は行政の権を有すれども兵馬財政の権なく、布政使は財政の権を有すれども兵馬の権なきが如く、又兵糧は道台¹⁰⁾ の権に属せるが如し。故に一人反意ありて非望を企つると虽も容易に遂げ得べきことにあらず。然れども政務は日一日に怠慢に流れて匡濟すべからざるに至れり。是れより先き清朝は数千年来幾多の革命を経たる歴代の治乱に鑑み、殊に明代の治に習ひ朝野権勢平均の政制を施して子孫萬世の基を開く。祖宗の注意尽せりと云ふ可し。然るに今日に至りては政治の機関弛緩し、冗員多く偷安苟且¹¹⁾ の弊風充滿し諸事凝滯を來たし民力大に疲勞せり。

支那は任官の弊亦甚だしくして、人材を擧ぐるは則ち愚人を擧ぐるの姿となり居れり。凡そ官吏となれば利を得るの易くして且つ大なるは、世間如何なる事業も之れに及ぶものなし。「三年の清知府、十萬の雪花銀」¹²⁾ と云ふ諺あるに至れり。而して余其實際を見るに、清廉なるものと虽ども三年には大抵三十萬の金額を有するに至る。清廉の知府猶然り。況んや卑吝の知府に於ておや。而して其官吏となるの法如何と云ふに、正義の訓読と八股の文法¹³⁾ と其妙を得れば豆腐屋の子弟も大臣と爲り得る仕方なり。即ち朱子の集註¹⁴⁾ を暗誦して片言半句の差違なきときは及第す。又八股の文法とは唯對句を能くするを以て第一

とし、実際には活用なし。若し自身の意見を書して対策するものは、仮令如何なる妙案と虽ども零点となるなり。

斯くの如く馬鹿げたる試験を経て知府知縣となるを以て、実地の事務に至ては一も爲すこと能はず照會狀だも認むる能はざるなり。故に事務に慣れたるの庶吏を置きて一切の事務を放任す。庶吏は長く一衙に在りて事務に練達せるを以て、此愚知府を愈々愚にし萬事を専らにし放肆只其意の欲する所の俤なり。「明の亡ぶるは安閑に在り、清の亡ぶるは庶吏に在り。」との俚言あるに至れり。

右の事たる其弊害少からずと虽も猶之れより大なる弊害あり。官吏の官金を私し賄賂を貪りて飽くことを知らざることを、上大臣より下小吏に至るまで皆然らざるはなき是れなり。上下相欺き誅求至らざる所なり。賄賂あれば如何なることをも行はれ、賄賂なければ不平の俤にて過ぐすより外なきなり。今左に二三の実例を擧げて之れを証せん。

支那帝国の歳入は九千余万兩、即ち我一億三千余万円あり。其内訳を擧ぐれば、地租にて四千万兩、塩税にて八百万兩、釐金税¹⁵⁾にして一千二百万兩、新旧兩関税にて千八百万兩、其他雜税にて一千二百万兩とす。而して関税一千八百万兩は海外派遣の公使及び留学生と税関吏との費途に充て、其餘剰は悉く海防費に投ぜり。然らば則ち僅々たる七千兩を以て一大帝国の政費となし、中央政府より地方文武の費途に充つるの割合なり。然り而して大清會典¹⁶⁾と称する法ありて租税の率を定めたり。是れ祖宗立つる所の法にして今俄に變改して増率すること能はず。若し一朝増税せんと欲せば民怨の恐あり。今日国費多端の際清廷の困難極まれりと云ふべし。而して官吏が政府と人民との中間に在りて官金を私するの高は現歳入の三倍に上るならん。官吏若し清廉にして愛国の精神あらば、歳入増加し人民敢て困難を感じざるべしと虽も今は税源涸れ果てたり。米を以て上納するは二三省にして他は大抵金納なり。而して其納税額は二円位なるも税吏は六円位の割合なりと伴りて徴収す。又尚之れより甚だしき困難を人民に與ふるものあり。即ち一時に租金を整へんと欲し米を賣却するが爲め、其相場頓に下落し一円八十錢位にて賣拂ふを得れば最上とする位なり。且

つ収納する金銭は大錢（小錢は長髮賊等の 鑄造に係するものにして政府に於ては小錢二枚を以て大錢とし通用す）にあらざれば通用せず。故に一石の租を納むるものは三石以上の米を賣らざるを得ず。地租は其高甚だ多からずと虽ども其実際は甚だ重斂なり。故に今に至りて之れを増加すること能はざるなり。

漢口は一百七十二万八千坪の大都會なり。此地は昔時蘆荻茂生せし地なりしを以て、彼の大清會典に依れば蘆の税として二百兩を納むるのみ。今は幾億萬の富を有したる豪商富家連接して其税額も亦幾百萬兩なるを知らず。然るに舊に依りて僅々二百兩を中央政府に納め、餘は悉く湖北の官吏打寄りて配当せり。兵備は一營に五百人ありて一將官（我少將位の者）之れを統率す。而して平時は三百人位を養成して二百人分の費用は將校等の私する所となる。若し一朝事ある時に當りては、乞食車夫の別なく一時雇ひ入れて兵員を揃へるなり。

刑罰の点に至りても亦然り。盜を訴ふるも賄賂なければ爲めに探索せず。逮捕するも詰問せず。賄賂あれば始めて之れを吟味す。若し又賄賂少なきときは、一時に究問せずして他日再び賄賂を入るを待て之れを判決するに至る。剩へ盜人の親族中より賄賂を贈ること多額なるときは、盜は忽ち無罪放免となる。故に人民は官の才判を乞ふことを好まず、有徳の進士¹⁷⁾に至りて之れが判決を受くるを常とせり。又會館として三四の進士ありて才判するの風習あり。故に支那國に於ては已むを得ざるに出づる自然の自治体を形造せり。

都察院¹⁸⁾の官吏に至るまで今は腐敗して用ゆるに足らず。現に一昨年の夏の頃なりし。余が漢口に在りしとき、湖南の巡撫に卞宝楨なる者あり。大に賄賂を貪るを以て彈劾せらる。依て朝廷より御史を遣はして之れを取調べしむ。御史至るや卞は之れに二萬兩を贈る。御史曰く一々承知せりと。歸り奏して曰く、彼れは猶古の即墨¹⁹⁾の太夫の如し。彼れが彈劾を受けしは陛下の左右に賄賂を行はざるによれりと。朝廷之れに由りて卞宝楨を賞して浙閩（浙江福建）の総督となし今日尚其職に在り。嗚呼今日の有様は實に腐敗の極点に達し、賈誼²⁰⁾の所謂火を投じたる薪上に坐し 安然として憂へざるものの如しと漢の當時を評せしは、今日の清國に適當なる評論と云ふ可し。今や萬年の基として頼みたる祖宗の法も、徒法に属して憫むべき境遇に陥れり。此危急存亡に際して外人

の支那に対し如何なる考を持ち如何なる方策を運らし居るやと云ふに、魯は佛と力を合せて長江以北の地を押領せんと欲し、英は之れを知り自から東部より進んで一人の手に入れんことを務めり。而して獨は却て支那人に結び、彼等の方策を害し其外面には甚だ支那に親切にして支那の爲に尽すが如くして、其実は三国をして共に争はしめ其の疲るを待ちて己れ之れを押領せんと欲するに在り。然らば中原の鹿、果して誰の手に落つるならんか。

斯く内憂外患交々到るの危機に臨みて 尚今日其独立を保ち得るは如何なる故ぞと云ふに、廟堂に人傑ありて一時を繙縫するに由るのみ（二十余年間続きたる彼の回賊²¹⁾及び髮賊の大乱を討ちし英佛聯合軍に当りたる人傑、猶ほ生存して大廈の將に倒れんとするを支ゆるに拠る）。此等の人傑は 餘命幾許もなかるべければ、今後の舉士²²⁾は愚法によりて及第したるものと少しく英文を解し得る位のものなり。我国人の知れる張佩倫²³⁾、何如璋²⁴⁾輩の如きのみ。而して張氏の如き福州の守令官となりて衆兵を指揮せしが、クールバーが一発の砲声に驚きて忽ち後峯に逃げ隠れたり。何氏の如き張氏の跡を尾して亡げ其艦体は悉く沈没せられたり。斯かる小人輩のみにては此大国は到底維持し能はざるなり。顧て我日本国が外国に対する政略は如何と問ふに、一定の方針なく又敢て爲すの力なく唯内政に就て狼狽するのみにして他に向け爲すの餘力なし。現今此亜細亜に国するもの其数十余個ありと虽ども、能く独立国たるの体面を有するものは日本と清国あるのみ。此兩國の内に於て支那は以上論ずる所の如き有様に陥れり。之れを救ひて東洋の平和を維持するものは日本人の責任なり。

（注）

この章は第一巻 p. 70-86 までであり、末尾に「明治廿三年一月一日荒尾精氏演述の要点」と付記されている。荒尾精氏は明治23年上海に日清貿易研究所を開いた。この研究所は東亜同文書院の前身と考えられる。

1) 清 中国の王朝。1616年、満州族のヌルハチ（清の太祖）は部族を統一し、明を駆逐して南満州に後金を建国し即位。次いで都を奉天（＝瀋陽）に定め、36年、2代太宗のとき、清と改称した。のち内乱により明が滅びたのに乗じて北京に遷都、東アジアの大半を支配する強国となる。康熙（こうき）・乾隆（けんりゅう）両帝の時代がその最盛期であったが、19世紀になって、西欧諸国の圧迫や内乱があいつぎ、辛亥革命の結果、1912年に滅びた。

2) 曾国藩（1811-72） 清末の政治家。吏部左侍郎在任中に太平天国の乱にあい、

- 郷里湘郷の農民義勇軍を組織して大功をたてた。この義勇軍は湘勇とよばれ乱平定の主力であった。また同治の中興においても功第一であり、中国士大夫の旧秩序にたちながらも中国近代化の端緒につくした。のち直隸総督として対外関係の処理にあたりし。程朱の学に親しみ文章もよくした文人でもあった。
- 3) 長髮賊の乱 反清反乱の太平天国の乱をいう。長髮賊、髮匪、粵匪などと称され洪秀全を中心として、1851年満州族である清朝の駆逐、男女平等、土地の均分、減税などを唱えて広西省で兵をあげた。南京を陥れたのち太平天国をたてたが、清軍や曾国藩などの郷勇の攻撃により鎮圧された。このとき天津、北京両条約により諸権利を獲得した英佛両国は、清朝援助を決定し常勝軍を強化し太平軍を浙江から一掃した。
- 4) 布政使 布政司、各省の行政事務を管督した長官。総督巡撫に直属す。
- 5) 秦 中国最初の統一国家を完成した王朝。はじめ周の諸侯で春秋時代に四川・陝西地方を領し、紀元前四世紀ごろ戦国七雄の一となり、政（始皇帝）のとき周室および他の六国を滅ぼし中国を統一した。前207年漢の劉邦（高祖）に滅ぼされた。
- 6) 漢 中国古代の王朝。紀元前202年秦のあとを受けて劉邦が創立し、202年献帝が廃されるまで。前漢・後漢に分かれ 両者の 間十数年王莽が天下を取り中絶している。この間中央集権の確立、東西文化の融合、領土拡張などが行われ、国威をふるい文化が興った。
- 7) 覇道 武力を以て天下を治むる道。王道の對
- 8) 総督 長官
- 9) 巡撫 総督の次に位し一省の行政長官
- 10) 道台 我が国の県知事にあたる。
- 11) 偷安苟且の弊 トウアンコウショ、安楽をむさぶりなおざりにすること。
- 12) 三年の清知府十萬の雪花銀 清国の府の行政を掌る長官を三年もすれば十萬の財をなすということ。
- 13) 八股の文法 官吏登用試験即ち科举に應ずる者に課した文体で、一文を破題、承題、起講、提比など八部分をもって構成する。対句を用いて八つの段即ち八股とするのでこの名がある。清末にその害を認めて廃された。
- 14) 朱子の集註 朱子学の書籍のこと。朱子（朱熹）は南宗の儒学者で朱子学を大成した。彼は宇宙に理と氣との二元があり、万物は氣をうけて形をなし理をうけて性をなすと論じ、人生には本然と氣質との別があって、本然は善であって聖と凡は分かれなければならないけれど、氣質の清濁によって聖と凡は分けられると説き、居敬と窮理とをもって修養鍛練の二大綱とした。中国において長く 儒学の 準拠であつたばかりでなく、我が国でも徳川幕府に採用されて広く行われた。
- 15) 釐金税 清朝で国内通行の貨物に対して普通の関税以外に課した税。
- 16) 大清會典 清會典ともいう。清朝の典制を収載した書。
- 17) 進士 中国で科举に及第した者の称号、科举の行われた時代には会試に及第して殿試を経た者をいい、学生の月桂冠または仕途の登竜門で白衣郷相と称された。科举廃止後は大学卒業生で規定の試験に及第し廷試を経た者の称号となったが、昔のような名譽はなくなった。
- 18) 都察院 官吏の非行を弾劾し、各省を監察する役所。
- 19) 即墨 地名、中国山東省東部の町で同名県の県政府の所在地。
- 20) 賈誼 漢の洛陽の人、文帝のとき博士となり一年のうちに大中大夫に進んだが後にねたまれて長沙王の太博に左遷された。そののち梁の懷王の傅となった。漢朝確

立に功があった。

- 21) 回賊 中国内の新疆・寧夏・甘肅・青海・雲南・貴州などの地域に居住するイスラム教を信奉する回族（回民）の反乱で、清朝・漢族による圧迫に抗し武装蜂起した。やがて白蓮教徒の乱をはじめ反乱が続き、清朝支配が根底からゆるがされる。
- 22) 舉士 中国で科挙が行われた時代郷試に及第した者、進士の受験資格を生じる。
- 23) 張佩綸 中国清末期の官僚、1871年の進士、清流党の領袖として活躍、80年代の朝鮮問題、ヴェトナム問題で強硬論を展開、84年会弁福建海疆事宜に就任、フランス艦隊に敗れて免職、流刑、その後も李鴻章の幕下にありながら対日、対露政策で強硬論を主張した。
- 24) 何如璋 中国清末期の外交官、1877年初代駐日公使として来日、80年まで日本側と朝鮮問題などで交渉、この間海軍の建設を提案、83年福州の船政大臣となる。清仏戦争で全艦隊が撃沈され退官した。

II 支那商業地理の概要及び運輸上の一般

支那帝国は亜細亜の東部に位する大国にして、十八省に加ふるに新疆、東三省等を合せて廣袤九十余万万里、北は魯領西伯利、南は安南、印度、緬甸に接し、西は葱嶺を以て土耳其斯坦に界し、東は支那海（渤海より東京湾に至るの間）を隔てて日本及び呂宋と相對す。其屬地を除き本部は幅員二十七万万里人口三億六千万あり。物産豊饒にして運輸の便を極め、大小の都邑は五百戸乃至千戸以上の人家ありて到る處として商業繁盛ならざるはなし。

滿州盛京省の如きは、其繁盛なること本部に及ばずと虽も近來植民大いに増加せり。今其人口を調査するに山東より移住せしもの却て土人に超過す。而して吉林府の如きは愛親覺羅氏の根拠の地にして、人民は文事よりも武事を尊び文武官の設置殆んど北京と同じく從て繁盛を極む。此地方たるや鑛山炭山等の天賦の財源に富むと虽も、人民未だ之れを利用すべき開化の度に達せざるを以て其富本部に一步を譲れり。然れども開港場牛莊の一港あるが爲めに漸次此地の開化を進むるなるべし。

凡そ滿州蒙古等の屬地は甚だ寂莫たる荒野にして、唯游牧人種の居住するに過ぎざるを以て今日に於て貿易上研究すべき必要なし。故に之を省きて本部各省の地理の概略運輸の一般を述べん。

山 脈

支那の山脈は中央亜細亜の高地より起りて東に走り、四川の境に至りて四方に蔓延し、雲南、貴州、山東、山西、陝西、甘肅等の各省に至れり。内には深山高嶺あり丘岡ありて一言すべからずと虽も、概して之を言えば西北及び西南の各省は深山高嶺多く、東部の各省は平地にして沃野数百里に亘る。然れども福建省は唯獨り其趣を異にし、到る処として山ならざるはなし。此地の地勢たるや漸次高くなるを以て偶々此地に至るも、其地勢の左迄高きを思はざれども實際之れを測量するときは非常に高きを知る。此一省は言語人情風俗等自ら他省と異なれり。又東南及び東北の各省は沼澤地多くして中央の各省は沙原多し。又山東省は其東部山地にして西部に反つて平原あり。

支那の山脈を大別して三とす。即ち左の如し。

- 一、雲南、貴州、廣西、廣東、湖南、江西、福建に亘るもの。
- 二、四川、湖南、湖北、貴州に亘るものにして鑛山多し。
- 三、四川、甘肅、陝西、山西、山東より直隸に至るもの。

河川及び湖沼

大河小川到る処に縦横し又湖水ありて運輸の便をなすと虽も、其最も水運の便あるは中央部即ち長江一帯の地とす。就中 江蘇、浙江の二省を以て第一とす。此中央部に次ぐものは南部にして北部は遙々之れに及ばず。

陸 路

支那人は実に新事業をなすに魯鈍なるを以て、道路の如きも南方は水運の利盛なるにより甚だ不完全なり。而して都邑と都邑との間に官道の通ずるありと虽も其大なるもの三尺に過ぎず。之に反して北方は水運の利乏しきにより道路廣大其幅五六間乃至十間ありて、其最も廣き所は牛馬車四五輛を併馳し得べし。然れども今日に於ては道路を修繕することなきを以て、車輪及び馬蹄の跡甚だしくして其深きものは二尺許り、且つ道路は他の地面より低きを以て、雨天の時に於ては四方の水流れ来りて恰も河川の状をなし運輸交通を妨ぐるに至る。

以上記せし如く、南方は水運の利あり北方は陸路の便あるを以て、南船北馬

の諺あり。

陸 運

陸運を分て三とす。即ち左の如し。

一、車運 北部物貨の運搬は皆車運にして、車は長さ一丈五尺巾五尺にして牛と馬とを混交して十頭許を繋ぎ之れを牽かしむ。又車上小屋を作りて人之れに起臥し且つ帆を用いて牛馬の勞を助く。馭者は一名若くは二名なり。此地の牛は其体大にして馬と同じく馳走するなり。又小車ありて一人車後より押して之れを送る。又他に一人の綱引を用いることあり。大車は一日の速力六十清里¹⁾乃至八十清里を走る。而して其運賃百清里に付三兩乃至四兩にして、小車は貨物を積載すること三百斤²⁾乃至四百斤とす。大車の運搬は北方の各省即ち盛京、直隸、山西、山東、陝西、甘肅、河南等に行はれ、小車は南方に行はる。

二、馬又は駱駝の運輸 是れ重に北方に行はるるものにして其積載高馬二百斤内外、駱駝四百斤乃至四百五十斤にして、速力は共に一日八十清里より百二三十清里、運賃は馬銀四匁駱駝七匁内外なり。

三、人肩の運輸 雲南、貴州等の如き西南の地は高山峻嶺の間に在るを以て車舟を通ずるを得ず。爲めに人肩の運輸行はる。斯く不便の地なるを以て貨物の出入少なく随て商況沈静せり。人肩運に二種ありて、一は貨物を背に負ひ一は天秤棒を以て擔ふもの是なり。而して後者は南方に行はる。其重量は九十斤内外にして運賃は銀四兩なり。

以上陳述したるが如く、北部の運搬は車馬に依り山谷の間を通過するを以て荷造方最も堅固たるを要す。今支那人の荷造方を説かんに、漢口より蒙古地方に送る磚茶を荷造るに、先づ錫にて包み之れを箱に入れ然る後「アンペラ」³⁾を以て之を包み籐蔓を以て之を巻き又其上を綱にて綱形に縛し又之を「ベルツ」(竹にて編みたるもの)にて包なり。其堅固なる実に至れりと云ふべし。然れども其蒙古に達するや漸く板の箱を存するのみに至る。又支那人此荷造に錫を用ゆるは、蒙古地方に於て錫の價高くして茶と相半ばするによると。一挙兩得の策其注意実に至れり尽せる哉。因に記す、磚茶とは茶を瓦の形に固めたるも

のにして蒙古地方にて非常に貴重せられ貨幣の代用をなせり。

水 運

水運に内河外河の区別あり。

一、内 河 運 漕

内地の河川に支那形船を以て運漕するものにして、支那人の風力を用ひて帆を利用するは遙かに他邦人の及ばざる所なり。且つ内地の河川には高低非常の差をなす所ありて、之れに壩なる者を設け萬力⁴⁾を兩岸に備へて舟船上下の便を図る。而して川と川との間に水路の通せざるものあれば、貨物を卸し牛馬をして船を牽かしめ以て他の河に移す。凡そ内河に用ゆる所の帆船の搭載高は貳拾萬斤乃至五千斤にして、其速力は順風にて一日に二百清里逆風の時に在ては同里を走るに十日乃至一ヶ月を要す。其運賃は一定し難しと虽も、最も壩多くして舟行の困難なる宜昌より重慶迄即ち一千八百清里の間に於て上り四十日下り六日を要し、其上りの賃銀百斤につき貳円なり。他の各所は推して其廉なるを知るべし。又竹船倭船⁵⁾等を用いて如何に浅き河川と虽ども其水利を利用す。

二、外 河 運 漕

長江の往復并に沿海の運漕にして皆漚船の便あり、以て二十三の開港場を往復す。漚船會社は上海香港間に往復するもの二十社、船数百艘以上あり。此等の会社は皆上海に在るものにして、此社の中に於て長江沿岸を寄港するの船を有するものは八社あり。即ち招商局、太古、怡和、麥辺、和興、仁記、萃友、禪臣とす。漢口迄は八會社の船何づれも至らざるものなしと雖ども、宜昌迄航行するのは獨り招商局のみ。而して此會社の長江往復に用ゆる漚船は、総計四十艘にして其噸数は二三百噸乃至八百噸とす。又帆船ありて此各港間を往復す。天津より上海迄蓬船（支那形大帆船）にて十日乃至一ヶ月を要し百五十噸乃至二百噸を搭載す。運賃は時々相場によりて異なりと虽ども會社所有の漚船最も高く一己の私有漚船之に次ぎ、貨物の多きときに限り臨時発船する所の野鷄船を最廉なりとす。

支那は廣大の土地なるが故に氣候も亦各地同じからず。従て貨物の商況等に又期節ありて其盛衰を異にす。故に商人たるもの尤も茲に注意せざるべからず。今一二の例を挙げて左に之を述ぶべし。

漢口より雲南四川行の荷物を発送せんと欲せば、九月より翌年二月迄の間に於てせざるべからず。是れ河川の奔流は三月より八月迄の間に在りて、此地方の急流には航行に困難あるを以てなり。

天津の如きは十一月より翌年二月の末迄は氷結するを以て航行すること能はず。従て其間商況不振なり。然れども三月の初に至り白河の開くるや各船争て入港す。是れ第一着の船には政府より三百兩の賞金を與ふるの挙あればなり。茲を以て商況大に活動を極む。故に此等の期を失せざるの準備なかるべからず。牛莊地方は沼澤多くして夏季は瘴癘の気起り通行に不便なるを以て、嚴冬湖水の氷結するに乗り機を利用して貨物を運搬す。古昔ジンギスカン等の此地方に兵を動かすに、必ず嚴寒の候に於てせしは右の原因に由るなるべし。此の如き状況なるを以て其以前に於て貨物を同地に運搬すべし。

支那東南沿海及び長江沿岸の開港場二十二港の内に於て、日本商人の最も望を属すべき場所は何れなるや。之れを知る實に必要なことなれば左に之を陳述すべし。

廿二の開港場中、上海、香港、廣東、漢口、天津の五港は運輸甚だ便にして尤も繁盛を極む。就中 上海は長江一帶各地の分輸を司り、香港は福州江南の分輸の地なり。斯くの如く右二港は通過貿易甚だ盛にして、内地の取引賣買に於て深く望を属すべきの地にあらず。然らば何づれを最も重要な港となす。廣東、漢口、天津の三港を以て吾單純なる日本商人には適當の所なりと謂ふべし。今重要諸港輸出入の総計を示さん。就て見は其商況を察するに足るべし。

千八百八十九年輸出入総計貳億千七百八十三万二千八百十七兩の内にて

上 海	100, 792, 225兩
香 港	74, 598, 236 "
廣 東	27, 445, 049 "
厦 門	10, 206, 803 "

福 州	8,665,088〃
漢 口	5,581,695〃
天 津	5,517,014〃

備考 本表中に於て福州，厦門は砂糖の輸出多額ありて輸入額と大差あり。
故に輸入商の着目すべき所にあらずと知るべし。

（ 注 ）

この章は第一巻 p. 114-130までであり，明治二十三年十二月十三日と記されている。

- 1) 清里 一里は我が国のおよそ6町にあたる。したがって約660m。
- 2) 斤 普通一斤は160匁（肉類は120匁）であるから600g。
- 3) アンペラ アンペラ草（かやつりぐさ科の多年草）であんだむしろ。
- 4) 萬力 ろくろのこと。物を引きよせまたはつるしあげるのに使う滑車。
- 5) 倭船 昔からの木造船。

Ⅲ 支那貿易の要点

支那貿易の要は決して他にあらず。素より利外の利を望むべからず，又偶然の利を期すべからず。只彼の人情風俗慣習嗜好に投合し以て此等の事情を利用するに在り。是れ実に支那貿易の勝利を博すべき秘訣なりとす。

日本人從來支那貿易に於ては何が故に失敗するか，他なし総て諸般の物價なるものは素々日用生計品の價格より算出せられたるものなり。此故に日常生活費に至りては，商業上頗る重大の關係を有するものなり。從來我國商人支那に貿易を試むもの素より人情風俗習慣等を熟知するものとはなく，眼を一局の一部に放ち彼の品は支那の需要に應ずと輕々小資本を以て渡來せるもの皆是れなり。而して之れより愈々實地に働くに至るや，之れを支那人に比して甚だ高價の生計費を費せり。元來日清兩國全体の生活の度を比するときには左程兄弟はなかるべしと虽も，此等商人に至りては自然此奢侈をなすの風あり。故に其得る所の利（生計費に比して）少なく費す所は多きを以て勢失敗を來さざるを得ず。是れ遂に其成功を見る能はざりし所以なり。

然るに彼の西洋人は此の如く生活の度高く而して尚能く巨利を博し得たるは何ぞや。是又理由あり，其生活の点より見るときは実に霄壤の差のみならず

と虽も、彼等は大資本を以て事に当り支那人種の風俗習慣嗜好を察し、眼を全局に放ちて利を永遠に期する。是れ其勝利を制する所以なり。

此故に向後支那貿易に従事するものは先づ支那人の風俗人情習慣嗜好を察し、之れを利用して以て運動する覚悟なかるべからず。且つ眼光を全局に放ち一小部分を見て事を判断するの謬を避け、希望を目前に取らずして之れを遠大に期し資本を大にして生活費を節約せざるべからず。是れ此貿易唯一の要事なり。

支那商人は其幼時七八歳の頃より雑役をなして商家に使役せられ、追々時日を経て稍商業振合を會得するに至り漸く商事に預るを得、短きも三年長きは五年七年等にして卒業とす。是等は日本の風習と能く相似たる所あり。其卒業して後所謂番頭たるもの之れを董事¹⁾と称す。董事は常に若干の給料を受くるものなり。

支那人富豪のものは自ら店頭に出でて商をなすもの甚だ少なし。主人其信用せる所の商人たる資格を有するものを選び、之れに資本若干を與へ適當の商店を開かしむ。而して其主人たるものは時々其所有の店を巡視するに過ぎず。此等の店を預りし商者即ち董事は必ず若干（大抵二三百円）の給金を得、其下に多くの番頭を使役す。且つ右等の商者は一切家族を其商店に置かず、全く居宅と商店とを異にし毎朝何時より毎夕何時迄商店へ出勤することとせり。支那に於ける大商店は皆此種に在り。而して歳末結算の時に於ては別に純利の幾分を以て賞與となすは大抵日本と異ならず。但し中等以下の商店は勿論此の如きものにあらざるなり。

支那に於ける幼時の教育は中等以上に於ては正当なる教育をなすと虽も、其以下は総て頗る幼少の時より錢を與へて樂ましむるの風あり。元來支那には玩弄品甚だ少なく皆金錢を以て之れに充つ。此の如く小児の時より金錢を弄するを以て大に金錢上に於けるの利慾心を奮興し、此等の兒童にして已に十歳にもなれば最早度量衡の使用法を熟知せざるもの稀なり。此等の風習は或は徳義上の点より論ずるときは、左程賞美すべき事ならざるのみならず却て嫌厭すべきものなきにあらずと虽も、商業者たる位置よりして見るときは実に輕視すべからざるものあり。支那人の忍耐刻苦能く其業に勉め、金錢を愛して費すを知ら

ざるもの決して偶然にあらざるなり。

(注)

この章は第一巻 p. 38-44, 本文は以下官吏登用の実情を記しているが略す。明治二十三年十月十一日と付記されている。

1) 董事 公司即ち会社の取締役。

IV 支 那 の 物 産

支那は天然の物産豊饒にして、加ふるに人工に因て成れるもの亦少からず。然れども調査未だ完全ならざるを以て、其一斑を記し併て産出の地を示す。

米は支那食物中最も緊要のものにして、山東、河南、江蘇、浙江、安徽、江西、湖南、湖北の八省に産し、就中 江蘇、浙江を以て夥多なりとす。此八省より年々北京に漕運するもの四百萬石に下らず。其他福建、廣東、廣西、雲南、貴州、四川の数省に産すと虽ども甚だ多からず。直隸、山西、陝西、甘肅、及び東三省の地方は、小麦、大麦、粟、高粱を以て常食に供し往々陸稻を産するも亦甚だ多からず。

茶は支那に於て特に固有の植物にして最も有名なり。南嶺山脈の東北揚子江と黄河との水域に属する各地、即ち江蘇、浙江、福建、安徽、江西、河南、湖北、湖南、四川及び山東、廣東、雲南、貴州の十三省に於て之を産す。是れ支那の大宗とせる物産にして他国の及ぶ所にあらず。

蚕糸、棉、漆の三種も亦茶に次ぐ。其産出甚だ多し。蓋し蚕糸及び棉の兩種は、江蘇、浙江、河南、安徽、湖北、湖南、四川の数省に産し、野蚕は山東、盛京、山西の地に産し、漆は江蘇、江西、福建、浙江、湖北、廣東、廣西、貴州、安徽、及び陝西、甘肅の地に産す。

布帛の類は各省に於て之を製出すと虽ども殊に江蘇、浙江、福建、廣東、河南、四川、山東の地は、綢緞¹⁾、縐²⁾、紗羅³⁾、錦、綾、縐⁴⁾、紬、絨⁵⁾、棉布、苧布⁶⁾、葛布、褐蕉布⁷⁾、竹布⁸⁾の類を出す。砂糖は福建、廣東殊に多く四川之に次ぐ。

紙は直隸，江西，浙北，安徽，福建，湖北，湖南，四川，廣東，雲南に於て之を製す。竹紙あり桑皮紙あり柳條紙あり藁紙あり。

磁器は直隸，江蘇，安徽，河南，福建，江西に於て製出し内輪外出共に盛なり。

桐油，茶油は江西，浙江，湖南に於て製出す。豆油は滿州に於ける第一の物産とす。

塩は直隸，盛京，山東，江蘇，福建，廣東の沿海皆之を製し，直隸，山西，陝西，甘肅，四川，雲南，貴州の塩地塩井に於ても亦之を製す。

菓物は北部に葡萄，蘋菓⁹⁾，柿，棗，胡桃¹⁰⁾，中部に蜜桃，揚梅¹¹⁾，南部に橘，龍眼，荔枝¹²⁾，波羅密¹³⁾，橄欖¹⁴⁾の類甘味を有するもの多し。

支那人の貴重する薬種，大黃，黃連，附子¹⁵⁾，甘艸，人參は甘肅，四川及び滿州の地に産し，麝香¹⁶⁾，鹿茸¹⁷⁾の類は西部及び東北の山地に出づ。

酒は浙江に醸造する紹興酒多額にして全国の需用に供せり。山西の汾酒，滿州の高梁酒其販賣甚だ廣し。

礦物の出産は未だ其景況を熟知する能はずと虽ども，其石炭に富むは他の諸国未だ支那の如く夥多なるを開かず。殊に大石炭脈及び光輝石炭脈は西部の山中に在り。英國の学士安蘇鉄德氏¹⁸⁾の編輯せる西歷千八百五十一年英國大博覽會出品録に，英國の石炭山は一万二千方英里，合衆国は十三万方英里なりと云へり。然るに英國の土木学士キングスシル氏の測算する所によれば，支那は其北部の地に於て八万三千方英里の石炭山を有すと云ふ。其石炭に富むと概知すべし。而して支那人の石炭を用ひ来りしは既に一千三百余年に及べりとす。現に採掘する所のものは直隸，山東，山西，福建，四川，湖南，雲南，盛京の地にして，就中直隸，山西，四川，湖南等を有名なりとす。近時直隸の開平，江蘇の銅山縣，安徽の貴池縣，湖北の荊門州は共に煤鉄を産し，資本を公衆に募り機器を歐洲に購ひ洋人を聘し採掘に従事せり。開平礦の如きは一株の原價一百兩のもの，現今騰貴して一百二十兩の價有するに至る。其出産の旺盛なるを卜知すべし。

金は直隸，甘肅，四川，雲南，廣東，廣西の地に産す。其採法は或は川底よ

り採取し或は沙地より淘汰し或は地坑より採掘せり。

銀の出産殊に多く且つ其純淨なるものは、廣西、雲南、貴州、河南、廣東、甘肅の各省とす。就中 雲南より産するもの殊に多く、一歳中大約一千一百万両に当る多額を出せり。直隸、承德府の三銀鑛及び盛京白土の銀鑛は、資本を公衆に募り歐洲の機器を用ひて採掘に従事す。資本一個の股分原價五十両のものの已に騰貴して六十二両の價を有するに至れり。其他廣西の鉛鑛より産する所の銀も亦少からずという。

鉄は直隸、安徽、浙江、福建、湖南、河南、山東、山西、陝西、甘肅、四川、廣東、廣西、雲南、貴州の諸省に産し、直隸及び山西に産するもの殊に多額と云ふ。

銅は安徽、福建、山西、陝西、四川、雲南、廣東、廣西に産出す。從來全国の需要に足らざるを以て年々江蘇、廣東等の商賈をして我邦より購入せしむるもの少からざりし。而して現今資本を公衆に募り機器を購ひ採掘に従事するもの、直隸省に於ては平泉州及び順德府、湖北省にては長樂、鶴峰の各縣にて、此数処に出産未だ旺盛ならざるを以て一個の股分原價百両のものの九十両より七十両となれり。

錫は福建、湖北、湖南、河南、山東、山西、四川、廣東、廣西の地に産し、鉛は江蘇、江西、福建、湖南、貴州、廣東、廣西の地に産し、水銀は湖南、四川、貴州、陝西に産し、朱砂は安徽、湖南、陝西、四川、貴州、廣東、廣西、雲南の地に産す。青礬は安徽、湖南、河南、山西の地に産し、其他硫黃、明礬、礬砂¹⁹⁾、黒鉛、浮石の類を産す。又花崗石及び各種の硬石、蠟石等を産し建築の外飾とす。温泉は直隸、盛京、山東、山西、陝西、湖北、四川、福建、廣東の各処に在り。火井は四川にありて石腦油²⁰⁾を湧出す。又雲南省産する所の紅寶石²¹⁾、翡翠石、碧玉、白玉、花崗石、猫眼石、緑青の宝石、直隸省産する所の瑪瑙、陝西省産する所の藍田玉²²⁾、雞血石、福建省に産する所の寿山石²³⁾等是有名の物とす。且と廣西、浙江、江西の地に於ては頗る多額なる陶土を産せり。

植物は南嶺山脈以南回帰線に當る 沿海地方は自然熱帶地方に生ずるものあり。

即ち水稻、椰子、甘蔗²⁴⁾、芭蕉、蕃薯²⁵⁾、芋²⁶⁾及び花梨、籐、藍、黒紫檀、沈香²⁷⁾、丁子²⁸⁾、荔枝、龍眼、香櫞²⁹⁾、橘、橙、佛手柑³⁰⁾、金柑、波羅密、楊梅、橄欖等の如き之れなり。其山嶺山脈以北には熱帯地方の植物少くして寒地に生ずる草木多し。

南嶺山脈と黄河との中間にして凡そ北緯二十五度より三十五度の間にある平坦地に繁殖するものは、五穀、茶、棉、密柑、橙、桃、楊梅、甘蔗等多く其他梅、漆、榴、桑、樟、栗、竹、松、杉、楊柳等多し。

黄河より以北凡そ三十五度より四十二三度に至るの地は、小麦、大麦、大豆、小豆、高粱、蚕、豆、粟、烟草、蔬を産し、樹木は楊柳、槐³¹⁾、松、杉の外種類甚だ少く、之に反して葡萄、蘋果、梨、柿、棗、胡桃等の果物は殊に好風味なり。

支那人の庭園に栽培して愛賞する所の草花は翠菊、牡丹、芍薬、菊、丁香其他数種あり、芭蕉は北亜米利加の如く盛ならず。生姜及び葱は全国一般に之を愛食す。南方に在ては蘭を以て席を織り竹を以て家屋及び器具の用に供す。支那人用ゆる所の薬種は人参を以て最も貴重す。満州其他の山林中に生じ其地方に住する八旗兵³²⁾之を採取し帝室の所用に供す。故に其生長する地方を官山と称し人民の採取を禁ず。芍薬、茯苓³³⁾、地黄、茴香³⁴⁾、槟榔子³⁵⁾、肉桂、大黄、貝母、羊夏、薏苡³⁶⁾、仁香、附子、甘艸、柴胡、細辛、川芎³⁷⁾、天南星、巴豆、沈香、神麴³⁸⁾、縮沙³⁹⁾、等は支那各省皆之を産す。

蔬菜は西瓜、東瓜、甜瓜、茄子、黄瓜、白菜、菠菜、蘿蔔、豆芽菜、金針菜等の類多し。

動物は南部に於て犀、野猪狼あり。西南地方及び瓊州には大なる猿の種類あり。西部には麝鹿あり最高の岩上に住すること恰も山羊の如く、亦水牛、羚羊⁴⁰⁾、山鼠、穴鼠、赤鼠、刺蝟⁴¹⁾、狐、兔、狸、土龍、水獺、等の各種を各地にて見る所なり。

北部には満州に熊、虎、豹多く沙漠の南に於て馬、牛、羊、駱駝、最も多く馬は大ならずと虽ども骨格甚だ強壮なり。此種の馬は軍用となし驛站に供し其用に適せり。四川馬は甚だ小にして高麗馬に彷彿たり。然れども石地を奔走し

て蹶躪することなし。支那人は冬季禽獸の肉を凍固して市に販賣す。即ち鹿、野猪、山羊、兎、鵝、鴨、鶏、雉、鶉の類なり。

東北地方にては多く駱駝、騾、馱、を使用す。駱駝は背に二個の肉峰あり。其形恰も鞍の如し。又一個の肉峰あるものあり。其毛は甚だ長く沙漠中に在ては殊に必要な獸とす。最も馴良にして且つ喝に堪へ行歩又神速なり。

通常の家獸は犬及び猫、家猪、牛、馬の類とす。家猪、家羊は一般に日常最要の食獸となす。牛は専ら耕作に用ひ食用に供すること少なし。水牛は印度、埃及の産よりは小にして其色透明なり。且毛少なきを以て甚だ辨別し易し。山羊は北方に多し。綿羊は多く嘉峪関外に産す。北京帝室の園囿に飼養する四不像⁴²⁾は即ち豹駝の類にして他邦其種類稀なりと云ふ。

禽類にて其家禽は鶏、鴨、鵝、鴿とす。鶏鴨の卵は人工を以て孵化し、鴿卵は燕食の珍味とす。玩弄に供するものは白綬、雲雀、鸚鵡、海東青の類なり。金銀雉、鸚鵡は支那国に於て固有のものとす。孔雀は西南の地に多く、烏、鴉、喜鵲⁴³⁾、鳶、雀は到る処之れあり。沼澤には各種の水鳥あり。天鵝、野鴨、鸛鵒⁴⁴⁾は中央諸省に多く又美麗なる鴛鴦⁴⁵⁾あり。鷓鴣⁴⁶⁾は吳越の地に在り。燕は季を追て去来す鷹の類にして海東青なるものは満州に出づ。人之を愛養して放鷹に供し且つ羽を取て矢を作る。蜚蜴⁴⁷⁾の大なるものは支那に於て多く見ざる所なれども其尋常の大なるもの及び蛇の種類は甚だ多し。然れども有毒なるものは甚だ稀なり。蝎子⁴⁸⁾は毒虫にして支那人の甚だ恐るるものなり。臭虫⁴⁹⁾は牀下に生し夜間人定まるを待て人を螫す。無血虫には蚕を以て最要のものとす。蚕家あり野蚕あり。家蚕は南方各省殆んど之を養はざるなし。就中 江蘇、浙江両省尤も多く外国輸出の大宗となす。野蚕は山東、山西、盛京等北方二三省之を養ひ絹、紬を製す。蜜蜂は古来より之を養ふの法あり。荒蕪の地方には雑草中に群集す。満州の地に帝家の養蜜所あり。虻は満州の地殊に多く亦其毒を逞ふ。行旅及び牧者等往々之が爲め螫殺せらるることあり。白蟻、蟬、胡蝶、蜻蛉の類亦多し。蝗虫は庄稼へ害をなすこと多く、若し発生の時勉めて之を撲滅せざれば其群飛する時に當りて日光爲に暗く、庄稼に害あるや水稻、高粱、粟等の類瞬間にして青色を失ふに至る。故に発生すれば官爲めに賞を懸け撲滅

に従事せしむ。

支那は国内河流沼澤多きを以て魚介に乏しからず。鯉、鯽⁵⁰⁾、鰻、鱸魚⁵¹⁾を以て有名とす。鰻は二種あり。一は其尾扁平にして通常のものに異ならず。一は円尖にして恰も蛇の如し。且つ養魚の術は古来より傳ふる所にして稍其妙を得る。魚蟹の類亦少からず。而して支那人の漁業は甚だ拙劣にして実に見るべきものなし。

(注)

この章第三卷 p. 72-86, 本文は二十四年九月頃記されている。

- 1) 綢緞 チョウタン, どんす
- 2) 縐 シュ, しゅす
- 3) 紗羅 サラ, うすぎぬ
- 4) 縐 シュ, ちぢみ
- 5) 絨 シュウ, 厚い毛織物
- 6) 苧布 チョフ, からむし, 麻の一種で織った布
- 7) 褐蕉布 カツショウフ, 粗末な毛織物
- 8) 竹布 チクフ, りんねる
- 9) 蘋果 ヒンカ, りんご
- 10) 胡桃 コトウ, くるみ
- 11) 揚梅 ヨウバイ, やまもも
- 12) 荔枝 レイシ, 龍眼に似た果物
- 13) 波羅密 ハラミツ, ばいなっぶる
- 14) 橄欖 カンラン, おりーぶ
- 15) 附子 フシ, 毒草とりかぶと
- 16) 麝香 ジャコウ, じゃの臍にある香囊より取りたる香
- 17) 鹿茸 ロクジョウ, 鹿の袋角, 出たての角を切り取って薬用とする
- 18) 安蘇鉄徳氏 アンステッド氏のあて字
- 19) 礞砂 ドウサ, 一種の薬石
- 20) 石腦油 セキノウユ, 石油精
- 21) 紅宝石 コウホウセキ, 紅玉, ルビー
- 22) 藍田玉 ランデンギョク, 藍田から産する玉石
- 23) 寿山石 ジュザンセキ, 臘石の異名
- 24) 甘蔗 カンショ, さとうきび
- 25) 藩薯 バンショ, さつまいも
- 26) 芋 さといも
- 27) 沈香 チンコウ, 熱帯に産する香木, この木から香を製する
- 28) 丁子 テイシ, 果実は香料薬品にする, 丁香
- 29) 香櫞 コウエン, けんばなし
- 30) 佛手柑 ブツシュカン, 暖地に産する果樹, 実は人の手の状をなし香氣多し, 香櫞と同種

- 31) 槐 えんじゅ、アカシア
- 32) 八旗兵 清朝帝室の護衛兵で八つに旗分けされていた
- 33) 茯苓 フクレイ、松の根に寄生する菌類薬用に供する
- 34) 茴香 カイコウ、ういきょう実は薬用食用に供す
- 35) 槟榔子 ビンロウジュ
- 36) 薏苡 ヨクイ、蓮の実をいう薬用となる、ススダマともいう
- 37) 川芎 センキュウ、らんなかずら根を薬用とす
- 38) 神麴 神曲シンキョク、古来食欲増進整腸などに効果があるとされて薬用とす
- 39) 縮砂 シュクシャ、豆蔻属植物で薬用とす
- 40) 羚羊 かもしか
- 41) 刺蝟 シイ、はりねずみ
- 42) 四不像 鹿の一種で頭は鹿、脚は牛、尾は馬、背は駱駝に似ているのでこの名がある
- 43) 喜鵲 キジャク、かささぎ
- 44) 鸛鶴 こうのとり
- 45) 鴛鴦 おしどり
- 46) 庶鳩 シャコ、鳩の一種胸に白い丸い斑点がある
- 47) 蜚蜴 とかげ
- 48) 蝎子 さそり
- 49) 臭虫 なんきん虫
- 50) 鯽 ふな
- 51) 鱸魚 すずき

V 支 那 の 製 造 業

支那は四外皆野蛮たりし 往古より文化夙に開け随て製造物の発明も亦多し。就中 船舶、羅針盤、火薬、活字、板紙、陶器の製造は、其発明現今開化を以て誇称せる歐洲人に先つこと数百年前に在り。然れども往古の文化中道にして止り、製造物の研究も亦依然として進歩することなく只其発明者たるの名を留むるに過ぎず。如今政府及び民間にて製造の著しきものは、即ち造船廠あり製器局あり製呢局¹⁾ 塩局あり。皆官業にして造船、製器、製呢の三局は法を歐洲に採り、織造、製塩は自国の制を用ゆ。民間製造物の全国に流布し或は外国に輸出するものは、陶器、鈕扣、酒、爆竹、絹布、紙、七宝珠、玉器、油傘、彫刻物、漆器等にして、其他人家日用のものに至りては内地に製造するものを以て内地の需用に供し、更に欠乏あることなしと虽ども製造物の外国に輸出するもの甚だ少なし。

北京藍靛廠に在る火薬製造所は支那從來の製法を用ひ甚だ粗悪なり。其製品

は京城八旗の使用に供す。使役する所の工夫日に八十人に過ぎず。又現今北京城の西凡そ十里餘の黒山口及び三家荘の両地に新設せんとする 機器局は小銃及び弾薬を製造し神機營の用に供するものにして、同營より士官二十名兵卒二百名を派し一ヶ年概ね五万両を以て之か費用に充つ。是れ京城機器局を設くるの始めとす。

天津に兵器製造局二所あり。一を河東機器局と云ひ一を河東寺機器局と云ふ。其創設は共に 同治の初年²⁾にして河東局は初め専ら 火薬を製し中頃林明墩銃³⁾を製す。然るに現今は其業甚だ旺盛にして製鉄機・製銅機あり。又火薬、砲彈、銃包を製造し並に銅鉄の諸器を作る。廠を分て鑄鉄所、製砲彈所、製銅帽所、製銃砲所、製硝石所、製火薬所、模範廠、木工廠、事務局、水雷局及び学生寄宿所、製水雷廠等あり。滾鐘大小十二にして三十馬力一日に煤炭四千磅を消費し、職工八百人役夫二百人を使役し英人二名を雇用す。年額約ね四十万両乃至五十万両にして時勢の緩急により同じからず。

海光寺機器局は河東機器局に比すれば狹隘にして滾鐘僅に三を備ふ。最大なもの三十馬力にして専ら銃包、小銃の改造及び諸機械の製造をなす。又木工廠より砲車の類を作る。局内職工凡そ五百人又水師学堂を此内に設く生徒二十名あり。

河南機器局は同治五年の創設にして上海を距る 凡そ一里半黃浦の左岸高昌郷に在り。局分て数廠とす。船廠、銃廠、礮廠⁴⁾、鑄造廠、機廠、砲架廠等なり。又翻譯局及英佛語学校あり。學生五十余人別に分局を襲華鎮に設く。水雷廠、銃包廠、火薬廠等なり。両局役用する所の工夫一千余人役夫二百余人西洋人十人、一ヶ年の費用は約ね六十万両とす。創立以来軍艦九隻を製作せり。

船廠は軍艦を製造する所にして廠外に船渠あり。廠内に木工舎及び鉄工舎あり。一器機を製する毎に先づ木工に命じ模形を作らしめ、之を鉄工に附し鍛造せしむ。小なる蒸氣鍋をも製造することを得べし。其結構至つて盛大なり。

船渠は長さ大約七十五間幅十間深之に適ふ。銃廠は三十馬力の蒸氣機関を裝置し林明墩銃を製造す。彈廠は各種の砲彈を製造し就中 阿母斯多龍彈⁵⁾を以て居多とす。礮廠は六十馬力の蒸氣機関を裝置し主として軍艦及び海防に使用

する大砲を製造す。其大なる百二十磅のものあり。所有の鉄は英より輸入するものに係る。

南京製造所は同治七年⁶⁾の創設にして一ヶ年の費用は七万両とす。江蘇厘金税の内より支出す。使用する所の工夫三百五十六學生二十名あり。英人一名を以て學生の教授をなさしむ。汽機四個あり。一は四十馬力一は十六馬力他二個は各三十六馬力にして、外に汽鐘二個及び汽鋸の備へあり。当時製造するものは阿母斯多龍の克魯普形⁷⁾の小砲及び戛杜林克砲⁸⁾並に砲台砲彈等にして、克魯普砲は毎月約ね一個戛杜林克砲は 每三月一個砲彈は大小一日約三十個雷管は毎日四万個水雷は三四ヶ月にして僅に一個を成作す。火薬製造所は通済門外に在り現今製造をなさず。

安徽安慶府製造所は光緒初年⁹⁾創設にして規模甚だ大ならず。工夫凡そ八十人にして専ら小銃の修理並に口装銃の改造等をなすのみ。別に火薬製造所ありと虽ども破裂の災に羅り製造を廃せり。

福州馬尾製造所は同治初年の創設にして尤も盛大なり。特に船政大臣を置き之を督せしむ。三個の造船床及び船艦を修理する所の運轉鉄臺一個あり。職工凡そ千四五百人を使役し一ヶ年の費用六千万両とす。佛人を雇ひ管理せしめ工業大いに進歩せり。製造所本部内に鋸器械所、模形製造所、試験所あり。其壕外に冶金所、鍊鉄所、鎔解所、海軍學校、造船學校等あり。海軍學校は英人之を管理し造船學校は佛人の管理する所に属す。創建の時より已に成工せる艦船二十四隻に及ぶ。然れとも鋼鉄及び木材等は概ね皆外国に仰げり。

廣州離明館火薬製造所は九十四実馬力の蒸氣鐘を備へ、一日製出する火薬は凡そ四百斤にして職工は五十人を使役し一ヶ月の費用千四百両なり。同館内に在る器機製造所は二ヶの汽鐘を備へ一は 六十九実馬力にして一は十実馬力とす。職工四十人あり一ヶ月の費用八百両なり。

黃浦造船所は二ヶの船渠を設け軍装局の附屬とす。軍装局は廣州城内に設け十六実馬力の汽鐘を備へ職人二百人を役す。一ヶ月の費用二千五百両にして専ら砲銃の修理をなす。

浙江杭州府の軍装総局は二十馬力の蒸氣鐘一を備へ、白砲銅製の前装砲・後

装砲及び砲彈銃包等を製し且つ小銃の修理をなす。年額凡そ三万兩とす。又別に火薬局の設あり。

甘肅蘭州府の羅紗製造所は光緒六年に創設し獨逸より機器を購入し、其瀝力一は二十四馬力一は三十二馬力とす。同国人を雇用して之を管理せしむ。

吉林省に於ても亦現に機器局を設け歐洲より器械を購求し製造に従事せり。山東の済南府、四川の成都府、直隸の楽亭に機器局の設あり。

織造局は内務府の所管にして浙江の杭州府、江蘇の蘇州府及び江寧府の三処に設く。此地は皆産絲旺盛にして綢緞の織造最も盛なり。特に監督を設け帝室供用の織造事務を監す。一ケ年の費用各十四五万兩同省税銀の内より支出す。

製塩は支那古来より政府の管する所にして私製私賣を禁ず、沿海出塩の地は塩運使を設け製塩を監督し之を塩商に專賣す。各省は塩造を置き密賣を防ぎ肆に搬運するを准さす。盛京、直隸、山東、江蘇、浙江、福建、廣東等製塩の法は間々地方に依て其法を異にすと虽とも、概ね盛京、直隸、浙江の地は曬製¹⁰⁾にして山東、江蘇、福建、廣東の地は煮製とす。而て直隸地方に於て風車を以て海水を塩地に運入するの法は未だ嘗て他方に見ざる所にして最も便利の方法と云ふべし。直隸の西南より山西、陝西、甘肅の内地に塩池又は塩井あり。或は煮製し或は曬製し又自然に結晶せるものあり。四川、雲南の地は総て井塩を汲みて製出し、又塩井深きものは二百丈乃至三百丈にして口径尺に満たず。竹片を接続したる長筩¹¹⁾を井底に下し塩水筩中に満つれば、牛数頭を以て引き揚げ此塩滷¹²⁾を鍋中に注ぎ以て煮製す。四川の自流井に於ては煤氣を用ひ之を煮て花塩とし牛萃溪等に於ては之を煮て塊となす。之を鍋巴塩と云ふ。

支那民間の製造は都で會社を以て組織せる著大の職工場あることなし。只其製造物は各自職工にて之を製作し商人之を聚集して發賣す。故に製造に著明なる地と虽とも更に見るべき職工場の設けなし。且つ其景況の如何を知らんと欲するも亦甚だ難し。

直隸北京は琺瑯、仮珠玉を製造せり。琺瑯は即ち七宝焼にして歐洲喜んで之を購求す。仮珠玉は珊瑚、真珠、翡翠、白玉の類にして婦人の身体を裝飾するに供するものなり。

山東は多く野蚕を養ひ絹綢を製し河南は南陽綢最も有名なり。江蘇、浙江は生絲、布帛、綢緞、全国に冠たり。湖南、湖北、江西、安徽、福建は総て紅茶及び茶磚の製造多く、浙江の寧波府は仕臺椅棹等の什器を製造し紹興府及び山西の汾州府は酒を製造すること盛にして全国殆んど給を此府に仰げり。

安徽は筆紙墨を製造し江西は陶器及び紙の製造すること最も盛んなり。其陶器は全国の用に供するに足る。且つ歐洲に輸出するものも亦多し。湖北の武昌、漢口等は爆竹及び銅器を製出し、湖南、四川の地は製紙に名あり。福建は糖を製する夥多にして内輸外出許多なり。廣東は鈕扣、仮玉、器第、椅棹、漆器、雨傘を製造し、象牙細工の如きは其技微妙にして最も有名なり。

廣東鈕扣製造は省城に於て之に従事し發賣するもの三十余家、其器機は甚だ粗笨にして都て労力を以て之をなせり。故に例へば支那の職工は一日百個を製すれば百個を賣り千個を製すれば千個を賣るものにして、著大なる製造物なしと虽とも其製出の高に至ては亦大なるものあり。支那人民製造の景況は都て此範圍を出てさるなり。

(注)

この章は第三卷 p. 88-100, 本文は明治二十四年に記されている。

- 1) 製呢局 セイジキョク, 毛織物製造所
- 2) 同治初年 1862 (文久 2) 年
- 3) 林明墩銃 レミントン銃
- 4) 礮廠 ホウショウ, 大砲製造所
- 5) 阿母斯多龍彈 アームストロング彈
- 6) 同治七年 1868 (明治 1) 年
- 7) 克魯普形 クルップ形
- 8) 莫杜林克砲 カートリング砲
- 9) 光緒初年 1875 (明治 8) 年
- 10) 曬製 サイセイ, 曬は俗に晒, 日にて物を乾して製造する
- 11) 長簞 チョウトウ, 長い竹筒
- 12) 塩滷 エンロ, 塩土, 多量の塩分を含んだ土地

VI 支那内地商業の運轉

極めて簡短に云へば支那商人には、字号、行商、舗商あり。其團結には、地方團結、同業團結とあり。此等のもの相待て内地の商業を運轉す。以下逐次之

を略記せん。

字号の最も巨商なり資産の多きは百万両以上少きも数万両を擁して物貨を儲蓄し、時需に應じ多く本店を内地に開設し支店を各地に設置して物貨を販售¹⁾せしむる。純然たる我問屋商なり。主人は常に商務を監督し司事を雇使し、歳節、端午、仲秋に各支店より商況を報導せしめ、又自から時々支店又は取引先を巡回して商況を視察す。其重なるものは絲莊、綢緞莊、茶莊、銀莊、材木莊、藥材莊等にして、就中 銀莊の如きは信用尤も厚く信用取引の美習慣を適良に行へり。

字号の次に行商あり。仲買を業とし居を船車輻湊の地に設け、字号の信任を受くるに足る程の資本を有す。各地商家等の貨物を要するものは皆此行商の紹介により、字号と定約し又行商により各地に運輸す。行商の信任あるものへは字号は一信一報により直に貨物を送付す。而め其貨物は市街衢巷に肆²⁾を開ける鋪商（小賣店）の手に渡り、鋪商は之れを消費者に售る。下通りの成行は此の如くなるが此多尚又團結の組織あり。

地方團結は同府或は同省商賈聯合して會館を北京、天津、上海、漢口等の地方商賈輻湊する処に設け、交々協議して各自の利益及團結一般の利益を保護するものとす。同業團結は同地方同業者交互團結し（仮令は製絲地方には絲商連合し産茶地方には茶商連合するが如し）、會館公所を設け同業の利益を講究し協同會議する所とし、孰れも練達なる老商を擧げて其頭取とす。頭取は商況を審察し又各商紛議を起し嫌怨を生ずるときは和解周旋の勞を執るを常とす。外に學力ありて進士、舉人、貢生³⁾等の學位を有するもの二名を聘して館務を整理し、訴訟紛紜あるときは和解の勞を執り或は商業のため地方官と往来協議するの任を托す。以上を字号及び行商の團結とす。商資稍薄きものに至ては會館或は公所を建設せざるも、地方同商は相結び毎歲定期に相會し同商規律を整理し物價を一定し、又同商一般に係るのことあれば臨時と虽とも會を開き或は官に稟請し或は規約を定む。是を鋪商連合とす。

各匠工業も亦同地同業者毎歲期日（多く工業創始者の誕辰祭日を期とす）を定め會合し、同業の利害を考査し兼て和親の媒介とす。之を工匠連合とす。

扱此等の團結と團結との間、 字号行商鋪商との間、 相互の信用甚だ固きは驚くべき程にして実に其商業を活潑迅速ならしむる所以なり。 譬へは鋪商の貨物を行商に要求するあるときは行商は直に之を字号に報し、 字号は少しも疑を抱かず一報一函に應じて貨物を発送し決して滯滞することなし。 殊に行商の如き最も之に注意し常に数十名の健足者を雇ひ置き、 順次に地方字号を巡回せしめ貨物を催促し或は輕艇を備へて朝発夕達の便あり。 此信任し準備こそ実に支那商況の迅速なる所以なれ。 鐵道の便未だ開けざる今日に於てすら尚此の如し。 鐵道一たび通し一時間にして数十哩を走るに至らは幾十倍の敏捷を見ん。 此等のことは我商人の宜しく學ぶべき所なり。

(注)

この章は第四卷 p. 32-36、 本文は明治二十五年に記されている。

- 1) 販售 ハンシウ、 販売
- 2) 肆 シ、 店
- 3) 進士、 舉人、 貢生 シンシ、 キョジン、 コウセイ、 中国で隋の時代に制定され清末に廃止 (580-1005) された科挙 (官吏登用試験) の時代生員 (学校の生徒) で学行の優れた者を貢士と称し、 郷試に及第した者 (進士の試験である会試の受験資格者) を舉人 (舉士) と称し、 利挙に及第した者 (会試に及第して殿試を経た者) を進士と称す。